

不
多
旅

米寿記念
川柳句集

不才

坂本仙吉郎



著者近影



昭和49年 6 月撮影

目次

序文

橘高薫風

旅好き

(二三五句)……………一

百福百寿

(二四一句)……………四十九

うから

(九一句)……………九十九

あとがき

坂本仙吉郎

題
簽
西
尾
栞

序　　文

諺に「六十の手習い」とか、「八十の手習い」というのがある。いうまでもなく、年をとってから物事を習いはじめる晩学のことである。親仁形氣というのに「今迄は夢に見し事もなき新町通い、これ六十の手習」と、色気のあるのもあつて興味をそそるが、坂本仙吉郎さんの八十の手習いは、川柳であつた。

NHK文化センターの川柳入門講座の教室三十名の中で、今では一番の高齢者である。私に最も近い席で、右の耳に補聴器を当てて聞いてくださっているが、時にはうとうとと心地よさそうに居眠つていらつしやる。そうかと思えば、それは居眠りでない時もある、講話のあとで、「こんな句どうでつしやる」と、作句ノートを見せられることもある。このような一事でも分

かるように、仙吉郎さんの川柳は融通無碍なのである。

教室に見えた当初から、仙吉郎さんの句には旅に関わるものが目立ったので、私は「旅百句」を目指しなさいと言ったことを覚えている。孫百句を作る人もあれば、母百句、酒百句と人はさまざま、仙吉郎さんには旅百句を課したのである。以来数年、百句どころか優に百五十に余る旅の句は、八十を過ぎてなお健康な仕合わせ者なればこそその快挙である。

仙吉郎さんは、NHK文化センターの教室だけでなく、故川口弘生氏が主宰をされ、今は吐田公一氏に引き継がれている城北川柳会と、高杉鬼遊氏指導の翠洋会に所属して、気随気ままに川柳をたのしまれている。「百福百寿」の項は、それら句会での作品が主になっている。

最終項の「うから」での、晴子夫人を亡くされた時の作品は特に心を打つ。川柳としてはどうかと思えるほどの字余りの句も、編者が取捨の出来るようなものではなく、童のような純真さをもって読者に迫ってくる。北海道

への最後の二人旅の句も、それ故、「うから」の中へ加えることにしたのである。

尊きかな米寿、佳きかな川柳。

仙吉郎さん、おめでとう。

橘 高 薫 風

旅
好
き

早立ちの旅はお茶漬けかきこんで

国東の石仏群は道の端

室戸岬航跡残す白い船

高山に恐い名の酒鬼ごろし

朝市の輪島高山旅ごろ

飛驒の朝どの宿もまた朴葉みそ

ジャンボ機を降りてマイクロレンタカー

春雨に煙る城山涙あり

キビナゴに舌つづみ打つ宿の膳

薩摩路に地名ばかりの国分寺

高千穂の聖地は霧と鳥居だけ

胸をつく薩摩は知覧鹿屋の基地

青島で洗濯板のしぶき浴び

山越えにシヤンシヤン馬で鵜戸詣で

旅に出て心残りの句会あり

祖谷までも道幅広し定期バス

たどり来てこれがと祖谷のかずら橋

錦秋に時雨れる祖谷のかずら橋

浅草や田谷力三のボツカチオ

木馬館御堂につづく花屋敷

十二階工兵隊に毀されし
(関東大震災後)

門 前 町 手 焼 煎 餅 草 団 子

彫 刻 に 見 と れ て 堂 を 一 め ぐ り

旅 に 出 て グ イ 吞 み ば か り 見 て 歩 き

恋煩いは治さぬ草津の湯もみ歌

霧の色変る四万の湯のけむり

湯上がりにくつろぐ出窓水の音

群生の鈴蘭の里バスも混み

近江路の鮎ずしの味忘れず

蛸まで源氏を名乗り今に生き

浮き御堂湖西のネオン如何せん

埋れ木が江戸で大きく咲いて散り

涙あり盛綱陣屋跡いずこ

八景もまた一つ減り二つ減り

長命寺石段見上げ立ちすくみ

長命寺バスで楽々女坂

全国の神を祠った吉田山

戒律の厳しさ終えて詩仙堂

丈山の詞書あり庭に猪おどし

清水の舞台下より見るものぞ

永観堂楓の下の緋毛氈

砥部焼の里を過ぎれば遍路坂

山越えに三坂馬子唄足重し

波静かここも真珠の宇和の海

道連れになつたばかりの悔いもあり

足摺は海荒れてこそ絵にもなり

足摺の椿の道の石仏

松山で句碑又句碑に行き当り

坊ちゃんの朝風呂はここ道後の湯

大鳴門渦巻く潮を一またぎ

大鳴門見下ろす海に渦はなし

全山紅葉走るに惜しいろは坂

墓詣り七十越した子が五人

故郷に思い出多き城の午^ど砲^ん

十津川のゆれる吊り橋手をつなぎ

小豆島孔雀に道を譲らされ

兼六園見事な松の雪囲い

落葉焼く火に鮮やかな紅楓

水のない大正池の影わびし

松並木御成り街道生き残り

大野川見下ろす秋の磨崖仏

五月雨を外し最上の船遊び

長崎の鼻は台風御幸筋

山 国 の 御 陵 に 続 く 老 桜

箸 塚 の 女 の あ わ れ 言 い 伝 え

足 弱 に 歩 け 歩 け と は げ ま さ れ

壺坂に仏足石の数拝む

壺坂の大観音は他国の石

名匠あり伊部の里に立つ煙り

夜の航路丸亀城の灯が一つ

瀬戸内に昔話の鬼が島

戦国の尼子の兵火と一の宮

古図残しここも兵火の国分寺

三瓶山親子三代わらび狩り

二人連れ盗み撮られた露天風呂

阿波に来て訪ねあぐねた一の宮

一の宮向いの札所にぎやかに

釈迦堂でおかめの面と大根だき

信心は道の一字の色紙買う

民宿で手料理だけの旅重ね

滝道をうれしはずかし馬車で行く

初詣で大和三山正恵方

巖島戦の跡とも思われず

国分寺古図をたどれば石一つ

駒形で時候外れのどぜう鍋

尾道の文学小径又の事

瀬戸内の霧の難所に橋架ける

国 宝 の 甲 冑 俺 を 睨 む よ う

義 経 の 緋 緘 の 武 具 見 落 し て

早 朝 の 大 阪 港 は ま だ 眠 り

あ
こ
が
れ
の
夢
二
の
生
家
葡
萄
棚

川
柳
の
心
に
通
ず
夢
二
の
絵

清
十
郎
の
絵
に
お
夏
の
思
い
書
き
添
え
る

手を打てば応え集まる鯛の浦

香取宮地震封じの要石

鹿島宮太平洋の浪の音

犬吠の灯台撮りに銚子まで

持参したイーストマンの蛇腹つき

鳴雪を子規を育てた城下町

尾張美濃豪華に続く一の宮

真清田の宮域広き一の宮（尾張）

皇室と由緒も深き南宮社（美濃）

祭神にふいご鞆祭の金山彦

名刀の関の孫六こんな町

南宮に高松宮家の白椿

下市の割箸白し釣瓶ずし

下市で庭先に干す箸の花

樽酒の香りも殊に吉野杉

家康の本陣の跡碑が一つ

木曾谷の地酒うれしい七笑

臼杵大仏大日如来笑みふくみ

旅好きに地酒の瓶の数が増え

旅日記五日もすれば家のこと

桃の道なかに備中国分寺

備中の矢掛の町に脇本陣

旅の目処国分の寺や一の宮

因の島吊り橋長し鳴門ほど

大正九年（二句）

初旅は二十四時間瀬戸の海

安治川を上り川口船着場

海亀の産卵を見に日和佐まで

桂 浜 竜 馬 の 心 海 に 向 き

太 宰 府 の 飛 び 梅 今 に 花 咲 か せ

月 ケ 瀬 の 梅 林 ダ ム に 影 う つ す

虹の松原過ぎればやがて呼子浜

橘神社鳥居の前を素通りす

君の名の真知子は地獄の石の前

有明に来て不知火も見ずじまい

柳川の流れは緩く川下り

西長門ホテル窓際波寄せる

萩に来て窯元見ずに東光寺

津和野の町ここも呼ばれる小京都

町中は鯉の数より人の数

孫の土産和紙人形をよろこばれ

壺坂のお里の杖に愛深し

礼参りお里沢市二人連れ

百
福
百
寿

王朝の参賀は牛車軋ませて

目出度けれ百福百寿の床飾り

大人^{たいじん}はあやまちぐらい気にもせず

この我慢先を見越して居ればこそ

石一つ考えこんで小半時

拝観停止三年坂に人淋し

餌で釣る悪徳商法又はやり

美味求真値段の事は意に止めず

北前船見事に仕上げた船大工

律義者僅かなことを恩にきる

恩返し三十年も長からず

自立せよ自立せよとて励まされ

自立して始めてわかる世の苦勞

約束に背いて軍備進めてる

背信がわかりかけたで席を立つ

凡人は秘密をすぐに口に出す

好きだとも言えず源氏の本送る

茶筌さばき指の器用も親譲り

指切りを事のはずみでしてしまう

連休をどう生かそうか名所地図

筆遣い子供の絵とも思われず

吟行は梅雨の晴れ間の菖蒲園

花菖蒲カメラの列に見据えられ

紫のあやめも一株そえてあり

絵に画いた餅よとあっさり言つてのけ

先人の足跡たどる雪の道

飛鳥路のあそこもここも掘り返し

通夜の席身内の泣き上戸持てあまし

秋深し酒仙の詩をば思い出し

尼寺も拝観停止の仲間入り

スクラムを組まずにすます話し合い

御近所へ参りましたと顔を売り

これ見よとちと大型のイヤリング

悼 川口弘生先生

待ちわびし句会を待たず逝き給う

切札に錦の御旗のぞかせる

おくびにもぐれてる子の事口にせず

有難うその一言に世は和み

門までも送ってくれる人が出来

肩よせて送るに門が近すぎる

欲捨てて剃髪しても生きる欲

又一人気楽に言えた友が減り

だんまりの席を仲居が座を持たせ

その仲居もとは南で左袂

アンカーの實力首位を軽く抜く

調教師訓練きびし飴と鞭

早耳についまだわされどじをふむ

耳よりの話についついひっかかる

爪の色見つめニツコリ病み上がり

月並みのスピーチにして長すぎる

裏切りが選挙事務所に一人居り

バーゲンで群がる春の週末日

初詣で今日は今宮残り福

歯車の狂い始めた年となり

虫干しに秘蔵の版画色褪せず

ほほえまし振り袖姿の入社式

レジャーブーム若葉青葉の頃となり

豊臣も桐の一葉の如く散り

大見えを切るに階きざはし手頃なり

待望の吟行雨を苦にもせず

雨よ降れ御堂が影をうつすまで

高千穂の歌も聞えぬ建国日

店先に笑顔笑顔の初戎

君知るや肉弾という赤き本

年頭のハガキの来ぬが気にかかり

故郷に残る八十路の友二人

名乗らねど声なつかしい電話口

アメリカが買えよ使えと責め立てる

土なくて育つ草花硝子瓶

陶匠は土を求めて旅に出る

あこがれの閑谷学校桜どき

杉林抜けて北山光悦寺

袖垣のこれが名高き光悦流

東大をトッパで出たが平のまま

途上国トッパ争い命がけ

夏来ればつばくろという魚あり

雨上がり女の傘を持てあまし

本心を明かさぬままに旅に出る

本心を伏せて談合まとまらず

本心を聞かれてハタと口ごもり

本心を言いそびれまた聞きそびれ

浅ましや出馬見込んで恩を売る

一行も日記書けない事もある

同行の曾良に書かせた旅日記

木挽町若き団菊顔合わせ

若き頃読んだ不如歸・草枕

親子だなあと遠くから眼を細め

現代っ子親父の傘が邪魔になり

行樂地親は親連れ子は子連れ

手をたたき声を掛けても振り向かず

男の子シクシク泣いて帰るなよ

男
氣を出したが引っ
込みつかぬなり

男
だぞ負けても負けても勝つ意気地

清
十郎香華の絶えぬ水間寺

手を取って二人で登る急な道

力量を出せないうちに先越され

隙のある所を相手に見すかされ

宿敵は中々隙を見せぬなり

何年振り神田の町の古本屋

告白をしてから気分ホッとする

黒白をはっきりつけねば気がすまぬ

白い紙出されて大悟無の一字

白装束滝に打たれて何願う

選挙戦力があつて金に負け

腕力で小学生もボスになり

山下の一本勝負背負い投げ

転勤で重い役目を背負わされ

半分のその半分の切り具合

富士八合見下ろす登山者蟻の列

砂置場足すべらせて蟻地獄

待望の恵みの雨も一夜だけ

雨雨雨待ってましたと野良仕事

梅雨あけて花火がすめば盆踊り

松山へ坊ちゃん列車で通学し

同窓会子に連れられて松山へ

近々に会おうじゃないか大和路で

声高に河内音頭の鉦太鼓

薰風先生還曆

師の還曆紅いネクタイよく似合い

ありあわせ手早くすます海苔茶漬け

海近し料理の後の鯛茶漬け

笛吹けどおどらぬ輩数多し

須磨の浦あわれ青葉の笛の音よ

据膳で待つ雪の夜も午前様

雪降れば喜ぶ農家と泣く農家

故郷を思い出させる雪舞台

幼き日机並べた友の皺

同窓会恩師四人も八十路越え

再会に小学時代の友が待つ

体調にゲートボールの仲間入り

家庭菜園総勢遠近二十人

扇
風
機
冷
房
も
い
や
渋
団
扇

幸
せ
を
今
に
忘
れ
ず
月
参
り

街
路
樹
に
巢
作
る
雀
街
の
色

信 楽 の 赤 字 路 線 に 客 を 呼 ぶ

ウ エ デ イ ン グ ド レ ス 自 作 の 晴 れ 姿

ウ エ デ イ ン グ 借 り 着 と 見 え ぬ 色 直 し

通　　つ　　た　　か　　と　　聞　　く　　に　　た　　め　　ら　　う　　電　　話　　口

床　　柱　　北　　山　　育　　ち　　の　　し　　ぼ　　丸　　太

金　　ピ　　カ　　の　　御　　厨　　子　　の　　中　　の　　新　　仏

願い事かなわぬまでも百度石

値上げして赤字は減らず客が減り

酔う程にジョークも出ます女帯

う

か

ら

これだけでもうおしまいと孫に菓子

うからやから見守る中でケーキ切る

一言で万事おさまる祖父の声

病床日記（十五句）

年末の疲れと寒さで救急車

年賀状病床で書く羽目となり

娘や嫁のスクラム組んだ看護ぶり

有難や老妻までに看護され

絶対安静磔の刑今受ける

医師付きで自転車こぎの検査受け

えらかるが辛抱しやと先に言う

あつかまし余命のほどを聞いてみる

副院長に九十迄を保証され

許可下りた散歩は僅か廊下だけ

退院のゴールを前に自重する

阿波からは急遽空路で五人連れ

退院を明日に病室皆笑顔

退院に孫子揃えば十五人

病後として食事療法何もない

好きだった熱湯長湯が禁じられ

コーヒーは日に一杯と決めて居り

晩酌は酒一合を越すでない

ビールなら一本迄と決められる

自重してビール一本分けて飲み

細い糸つなぎ合わせて共白髪

腕相撲なんぼ力んでも孫に負け

指切りの約束孫へ旅土産

孫の事では夫婦の意見違わない

喜寿傘寿元気で居ようやいつまでも

妻はまだ北海道を知らぬなり

自分だけ早くに行つて気が引ける

折を見て二人で行こうと思っても

折もよし北海道百年記念祭

東京のツアーで決めた仲間入り

青森に着けば待つてゐる連絡船

本土との別れ名残りの船もこれっきり

船中の食事に烏賊の糸づくり

その味をいまだに二人で話し合い

函館に着けばまっすぐ湯の川へ

うら若い娘たち目につくトラピスト

函館の宿起されて夜景見る

順々にスケジュール通り札幌へ

札幌のシンボルはこれ時計台

北大のポプラ並木は通行止め

立ち寄りて銀河の滝流星の滝

カー温く大雪連山雪白し

見下ろして網走港の魚の市

流氷はシヨールとネクタイアイヌ織

摩周湖は何度も来たが霧のもの

阿寒湖のまりも見物船の中

阿寒湖のまりもバックに並び撮る

走り次ぎ十勝川温泉に宿をとり

白老のアイヌ部落のよき踊り

行くうちに昭和
新山煙り吹く

ドーナツ型洞爺湖
向うに羊蹄山

羊蹄山バックに秋を何枚も

此の他に二人だけの旅幾度も

北海道の旅終え肩が軽くなり

ああこれがアベック写真の最後かも

その頃は元気に次はどこにしようかと

妻は—足の具合が悪く医者通い

医者通いするも一向良くならず

歩くにも立ち止り又立ち止り

春頃より食事の好みが変わったと

病院へ紹介医者も怪訝^{げん}顔

本人には検査のための入院と

家族皆知ること私だけにはひたかくし

ある日車の中で息子「お母さんの病気どう思う」

毎日八時に病院へ手を握る事続く

嫁は夜中に付き切りで八時に私と交替す

時を見計らって主治医に病状は上向きですか下向きですか

妻の病状息子夫婦に告げてあり

もう駄目かと覚悟それでも毎日つきつきり

ある夜明けふいに家中ざわめきぬ

寝台車玉水教会へ廻り道

覚悟して居りても涙があふれ居り

告別式には金光教玉水教会の湯川真理子奥様、湯川輝代子奥様、高槻南教会の湯川栄子奥様に参つていただき、この上もなく有難いことです。

出社教会の先生、その他教会関係の方々や、親しい友人に参つていただき、町内会、ゲートボールの友人までが忙しい中参列してくださり、有難く思いました。

みまかりて早や三十日祭の日が来る

足弱をいたわり足らぬを今に詫び

黒梓の中より一声出して欲し

相撲好き名古屋の場所も見ずじまい

病持つ吾を残して先に逝き

目覚めても寝息いびきも聞かれなく

日がたつにつれて疎しというけれど

ダイヤ婚米寿と共に祝うはず

あと三年元気でいようと誓いしに

早過ぎた三年待たずに先に逝き

幸せに八十年を燃え尽くし

あちこちと妻と歩いた寺や宮

どこへ行くにも手を取り合つて二人連れ

父の日

寄せ書のみんなの顔が目には浮かぶ

あとほんの十日もすればバースデー

八十八年昔こまごま覚えても

あとがき

橘高薫風先生の「旅の句が百句出来たら本にしよう」の御言葉を励みに、「八十の手習」と川柳を始めてはや七年近くになりました。昭和五十六年一月に朝日カルチャーで薫風先生と出会い、その後、NHK川柳教室、城北川柳会、翠洋会等のお仲間に入れていただきました。若い人に交わり、故川口弘生先生、高杉鬼遊先生や先輩方の御指導で勉強に通い、川柳塔や句会に投句した句と、妻と旅した時の句を合わせると、知らぬ間に五百余りにもなりました。川柳歴の浅い私ですが、先生のおすすめで私の米寿と亡妻の供養も兼ねて、この度句集を出させていただく運びとなりました。

昭和五十七年四月には、薫風先生と故川口弘生先生の温かい御推薦で川柳塔同人の一員に加えていただきました。

句集の題字につきましては、二人で旅した思い出をとり、「ふたり旅」と

し、主幹の西尾棐先生にお願いしてご揮毫をいただきました。誠に光榮に存じます。

昭和十五年より戦勝祈願で御陵参拝を始め、終戦後は敗戦のお詫びの参拝となりました。二人で各地の仏閣に参詣した思い出の絵馬の数も増え、欄間に掛けきれぬ程になりました。御陵参拝後の鹿児島神代三陵は、二人だけでの楽しい旅となりました。土産に買ったハイビスカスの花は、今も夏になると美しい花を見せてくれます。

最後に主幹西尾棐先生をはじめ、橘高薫風先生、句の清記や校正を煩わせた翠洋会の西出楓楽様、奥田みつ子様、厚く御礼申し上げます。

拙い句集ですが何卒御笑覧いただきたく存じます。私はまだまだ元気で居りますので、余命を川柳一筋に打ち込みたいと思っております。

どうぞ今後ともよろしく御願い申し上げます。

一九八八年十一月吉日

坂本仙吉郎

著者略歴

坂本仙吉郎 本名 仙吉

明治35年6月 愛媛県三津浜町に生る

明治42年4月 三津浜尋常高等小学校に

入学

明治44年4月 愛媛県女子師範附属小学

校へ転校

大正6年3月 同校高等科を卒業

同年4月 愛媛県立松山工業高校に

入学

大正9年3月 同校を卒業

同年4月 大林組（大阪の本社）へ

就職

大正10年4月 同社東京支店詰となる

大正12年9月 関東大震災に遭う

大正14年12月 大林組を円満退社

昭和8年8月 藤木工務店に入社

昭和14年12月 同社を円満退社

昭和15年1月 独立自営して坂本工務店

を設立

昭和38年7月 組織を変更、坂本建設株

式会社として現在に至る

昭和56年1月 川柳を始める

昭和57年4月 川柳塔同人に推薦さる

現住所 〒535 大阪市旭区大宮三丁目二一 二一

川柳
句集

ふろし

一九八九年一月四日発行

著者 坂本 仙吉郎

〒535 大阪市旭区大宮三丁目
三一二二

印刷 萩原写真植字社

製本 平田製本株式会社

発行所 川柳塔社